まる子の生き方に学ぶ

県大・友原准教授が研究本

人気漫画「ちびまる子ちゃん」を、文化や音楽などさまざまな視点から学術的に考察した「ちびまる子ちゃんの社会学」がこのほど刊行された。編者は高知県立大の友原嘉彦准教授(40)。「まる子の〝自分らしい生き方〟が、これからの時代のロールモデルにもなるのでは」と研究意義を話している。

ちびまる子ちゃんは、3年前に53歳で亡くなった漫画家のさくらももこさんの代表作。さくらさんの少女時代をモデルに、小学3年の主人公・まる子と家族、個性的な友達との日々をほのぼのと描き、アニメも広く親しまれている。

友原准教授は小学生の頃、妹が愛読していた少女漫画誌「りぼん」でまる子に出合い、2年前に再読。その世界観に引かれて、専門の観光学の視点から研究を始めた。

「さくらさんは、社会の同調圧力や常識をすり抜けて、漫画やエッセー、作詞などいろんな分野で創造性を発揮した人。さまざまな分野の専門家に、さくらさんや『まる子』を書いてもらうのも面白いのでは」。そう思い立ち、昨春から共著の準備を進めてきた。

11人 専門分野の論考紹介

同著では11人がそれぞれの専門分野で論考を展開。比較文化が専門の三成清香さん=新島学園短大専任講師=は、まる子がずるくて情けない身近なキャラクターとして描かれている点や、「(クラスメートの)多様性が互いに否定しあうことなく共存している」ことを指摘した。

ほかに『おどるポンポコリン』はなぜ愛されるのか」「中国語圏におけるちびまる子ちゃんの受容」などが掲載されている。

友原准教授も、さくらさんの生涯について記し、たびたびバリを訪れたことなどについて考察を加えた。「さくらさんや『まる子』研究の鉱脈は深くて広い。今後も掘り下げていきたい」と話している。古今書院刊、3520円(税込み)。

(松田さやか)

「共著のメンバーは『面白そう』『実はさくらさんのファン』とすぐに乗ってくれた」と話す友原嘉彦准教授(高知市の県公立大永国寺キャンパス)

2021年11月27日(土) 高知新聞掲載記事